



園からの便り ひぐらし

色の置き場所

ここ数年、9月になると出かける場所があります。それは、子どもに関係する仕事に携わるものたちが、あれこれと語り合う、小さな集まり。花壇に揺れる色鮮やかな花々と、そこから仰ぎ見る空の雲の流れに、私にとって毎年、秋の始まりを感じる場所にもなっているのです。

そこで、ある造形作家が子どもたちと絵画製作をした時の経験談を語ってくれました。

それは、複数の子どもたちが、一畳ほどのひとつの大きな画面を囲み、手にした筆で、それぞれに自由に点や線、形を描き込んでいくという…いわゆる協同製作というものでした。

自分の眼下、手の届くあたりから描き始めることにはなるのですが、それがどんどんと広がっていくと、いずれ他者の描画と、どこかでぶつかることになりました。しかも、その製作活動には、気の

向くままに立ち寄って誰でも筆を握ることが可能なので、人も入れ替わっていくのです。

すると、始めのうちは、隙間を見つけて、そこに自分の色を入れるといった状況から、だんだんと他者の描画の上に、自分の色を被せ、それを塗り潰していくことになるのは当然の結果。

するとその時、その作家が子どもたちに投げかけたという言葉が、実にいいです。

「前の絵がもつと素敵になるように描いてね。」

また、下の色を覆い隠しかねない黒い

「強い色だから、気をつけて使ってね。」
私たち保育者には、少し思いつきにくい、素敵な伝え方に思わず唖りました。

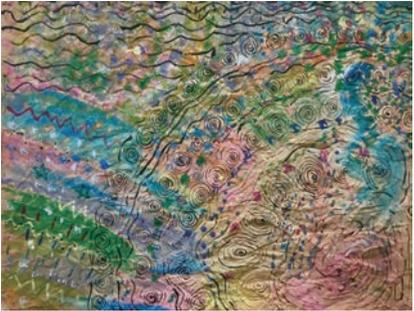


何の制約も受けずに、思うがままに筆を走らせる「発散するアート」もいいのですが、ここで行われていたのは、いわば「収斂するアート」。それを、「調整する力」と評した人もいました。

描画領域を区分けるのではなく、相手の描画に分け入るように、その周辺に自分の色や形を置く行為。その周囲に似せようとするのはなく、違う色や形で「もつと素敵になるように」、互いに「調和」を求めながら形作られた結果、そこにはストレートな感性の発露とは別の、周囲の気配を感じようとするかのような、少し繊細で、何か意思のこもったような…作品にはそんな感動がありました。

それぞれが色を置く瞬間、その「部分」だけで考えられたものが、見る者の心揺さぶる「全体」となっていく…そんな光景でした。

そうした実践を聞いた後ならば、早速それを実際に



秋の日の私たちの足跡

会話も弾んでいくのが面白い。画用紙の前に立つ者も、気の向くままに次々と入れ替わっていく。その完成に対して、自分だけで責任を負わなくてよいという気楽さもあるのか、思考を止めて、指先の赴くままに筆を動かせる

心地よさ…子どもたちにとつての造形活動は、こんなプロセスをふわふわと漂うことを楽しんでいるのだな…と。そして、出来上がった作品は、もうただの足跡…そんな思いも頭をよぎりました。



先日、テラスで折り紙遊びに興じる二人の子を見かけました。丁寧に折り上げた2トーンの手裏剣を、自販機に見立てた小箱に入れて、熱心に私に教えてくれました。色の組み合わせに応じて、「桃と爆弾のジュース」「空と林檎のジュース」…こちらでは、私にはとても追いつけないくらいの想像力を…存分に「発散」させているようでした。

園長 折井誠司

- 編集 誠美保育園
- 編集人 折井誠司
- 発行人 折井誠司
- 印刷所 誠美保育園
- 発行所 誠美保育園

社会福祉法人 誠美福祉会
〒192-0364 東京都八王子市南大沢5-1-2
電話 042-675-1551
ファックス 042-677-5643
E-mail sebi@nokuen.jp
http://nokuen.jp/